

「まるで、愛を失ったかのような 想いに急激に襲われたの」

1992年6月岩波ホール発で始まり、

2014年秋、泉鏡花「天守物語」をもって「百物語」、
全99話を語り終えた白石加代子はこのように語った。

…当初は肩の荷がおりて、すっきりしたと晴れやかな気持ちだったのですが、
時を経て次第に(まるで、愛を失ったかのような想い)に急激に襲われたの。

その想いを受けて、アンコール公演は始まった。

忙しい仕事の合間を見つけ、第一弾として、2016年、筒井康隆「五郎八航空」、

南條範夫「燈台鬼」、第二弾として、2018年、三遊亭円朝「怪談牡丹灯籠」、

第三弾として、2020年、夢枕獏「ちょうちんが割れた話」筒井康隆「如菩薩団」

半村良「箆笥」和田誠「おさる日記」、

第四弾として、2022年、宮部みゆき「小袖の手」朱川湊人「栞の恋」と重ね、

今回の二本は第五弾、2024年の上演となる。

好評で続いたアンコール公演も、第5弾をもって最期になる。

本ツアーは、東京、シアター1010で開幕し、全国10都市を回り、

大阪、東大阪市文化創造館での公演が大千秋楽。

プロデューサーの笹部博司は言う。

「白石加代子で新しい企画を作りたい。だから一度「百物語」は終活させたい」

80を過ぎてもう一花咲かせて、みなさんの元気になれるよう、

白石加代子は進化し続ける。

「百物語」ニューヨーク公演評

舞台は演者白石加代子だけ、ニューヨークの公演では、「人物
の変化とともに、語りのイントネーションも、表情も、姿形までもが
変化する。千変万化の白石加代子にとって視覚上の限界はない。
迷信深い母親も、権威的な父親も、いともたやすく、よどみ
なく演じ分ける。年齢すら問題ではない。この五十代の女優は、
赤ん坊でも死にかけた男でも、何の苦もなく生き生きと描き出
すのだ」と評され、ワン・ウーマンショー、たった一人のエンター
テイメントと絶賛された。

「百物語」について

白石加代子「百物語」シリーズは、明治から現代の日本の
作家の小説を中心に、「恐怖」というキーワードで選び、それ
を白石加代子が朗読するという形で出発した。上田秋成「雨
月物語」、泉鏡花「高野聖」、坂口安吾「桜の森の満開の下」、
江戸川乱歩「押絵と旅する男」、という幻想文学の傑作作品
から、半村良「箆笥」、筒井康隆「五郎八航空」、阿刀田高
「干魚と漏電」、高橋克彦「遠い記憶」、宮部みゆき「小袖の
手」、小池真理子「ミミ」といった現代作家の人気作品までの
幅広いレパートリーと白石加代子の朗読という枠を超えた
立体的な語りと動きの上演で人気を博している。

百物語は昔からある怪談を語り合う風習ですが、九十九話で
終わっているのは、百話語ると本物のお化けが出るという
言い伝えにならってのことです。

高橋克彦 「遠い記憶」

今まで上演された「百物語」の作品の中で、スタッフが何が
一番怖かったという話になると、まず文句なく一位になる
のが、「遠い記憶」である。盛岡在住のミステリー作家高橋
克彦の作品。そしてある意味、盛岡という場所が主人公
である。幼い時に育った盛岡に何十年ぶりかで仕事の
関係で行くことになる。盛岡の町の案内を世里子という
料理屋を営む主人公より、少し年上の女性が買って出る。
案内に従って町を歩くうちに、段々と記憶が蘇っていく。
主人公が美しい女性に導かれて、一步一步と恐怖に
近づいていくそのプロセスの導き方が、鴨下演出、実に
怖いのだ。「遠い記憶」の舞台を思い出すと、その時の
ドキドキがやってくる。



阿刀田高 「干魚と漏電」

「百物語」人気作といえば、「箆笥」「五郎八航空」そして「干魚と
漏電」が人気ベストスリーではないだろうか。口うるさくおせっかいで
人のいいおばあさんが主人公。おばあさんは、引っ越したばかりの
家の電気代が、前の家と間取りも使っている電気製品も同じなのに、
なぜか高いと集金人に文句をつける。白石加代子はこう語っている。
…あれは鴨下さんのいざない方がすばらしいの。主人公は「姉さん
かぶりの」って書かれているんだけど、本番で着たお衣装は和服で
なくてお洋服。しかも普通のお洋服じゃなくてカントリー風というか
ロリータ風というか、ちょっと素っ頓狂なおばさんよね。ちょっと間違
えるとわたし、ああいう人だから。お客は笑いに笑って、最後の一言で
凍りつく。

